



福島学院大学 大学報

VOL. **36**

福島学院大学 大学報
<https://www.fukushima-college.ac.jp>



ごあいさつ

私の目指す 福島学院大学像

理事長・学長 遠藤 克弥

私は、2024年度に福島学院大学の副理事長に就き、2025年度より学長に就任いたしました。それまでは、東京近郊の大学に30年以上勤めてきました。東京都と福島県は、新幹線に乗車すれば時間的には実に近い位置にあります。やはり距離的には離れており、気候や習慣も異なる地域である。この1年の生活で改めて感じました。私は、世界を飛び回るのが幼い頃からの夢でした。大学院留学時代や客員教授、大学の国際交流担当として長い時間をアメリカで過ごしたほか、海外の大学や研究会に加えてユニセフの委員や国際ボランティアなどで約40カ国を訪れました。

私も深く関係し、国際シンポジウムや海外の研究会にも頻りに参加してきました。そんな理由から、世界で初めてドイツで始められた「子ども大学」(小学生をはじめとした子どもたちのための大学)を知って、私は2009年にドイツに次いで世界で2番目、そして日本初となる「子ども大学」を友人たちと立ち上げ、その学長として運営に携わってきました。これは、大学のこれまでの概念を変えるものとして、文部科学省をはじめ国内で注目され、話題になりました。

さて、私が学長に就任して、何を考え、何をしたいのか少し述べさせていただきます。

私は、これまでに評議員や理事として

て福島学院大学に関わってきました。本学は長い伝統がある教育機関で、建学以来持ち続けてきた確固たる伝統があります。1966年に短期大学が開学し、保育科を開設してスタートしました。まさに幼児期の教育への貢献から始まったと言えると思います。その後、4年制大学の開設などを経て、現在は福祉心理、こども、地域マネジメント、保育、食物栄養の5学科を設置しており、様々な特色を持つ教育機関となりました。

特に短期大学部の「保育学科」、4年制大学の「こども学科」、そして同じく4年制大学で、福祉と心理学を学ぶ、子どもたちの心理研究も盛んな「福祉心理学科」を中心とする、幼児期の教育の指導者養成とその実践を柱に、本学が発展してきたことは明白です。ゆえに、まずはこれを大学の特色としてさらに強化するとともに、幼児から小学校までの幼年期の子どもたちの教育の在り方と、心理学的・福祉学的研究に裏打ちされた質の高い優れた指導者を育成し社会に排出することで、非常に大切な子どもの教育の出発点を担う

てきたことをさらに明示していきたいと考えています。そして、これこそ福島学院大学の大きな特色であり、一つの中心的な柱として位置づけるべきなのです。

そこで2025年度から「こども学科」で、保育士、幼稚園教諭の資格・免許に加えて、他大学併修による小学校教諭免許状の取得を目指すことが可能となりました。さらに福祉心理学科でも、小学校教諭免許状の取得が可能となるカリキュラムを整備していきたいと考えています。そして、大学を支えるもう一つの柱は、マネジメント学部の新たな発展を成し遂げることです。

私が目指す福島学院大学像とは、「Small, but Excellent」(小規模だが、優れた)大学です。社会で必要な実践的で質の高い知識や技術を得た卒業生が、地元はもちろん国際社会で活躍する大学になり、高校生たちが学びたい大学の一つとして福島学院大学を選ぶ、そんな大学にするために、これまでの経験を生かし、学長として全教職員と共に力を尽くす楽しさを感じています。



福島グローバルセンター開所

～福島復興の知見を世界へ発信～

本学は令和6年度、地域と世界をつなぐプラットフォームとして「福島グローバルセンター」を開所しました。東日本大震災、東京電力福島第一原発事故からの福島復興の知見を世界の研究者に発信、共有するとともに、学生や教員の国際交流を推進していきます。

令和6年5月16日、福島駅前キャンパスで開所式が行われ、同センター長の高選圭地域マネジメント学科教授がセンター

開設の意義や役割などについて説明。式に併せ、7か国・地域をつないだ国際会議

が開かれました。会議には本学、福島大学に加え、韓国、台湾、インド、ネパール、ベトナム、フィリピン各国・地域の研究者がオンラインも交えて参加し、「グローバル復興ガバナンスモデル構築に向けて」をテーマに意見を交わしました。



開設を記念して開かれた国際会議



センターの役割などを説明する高教授

センター長あいさつ



福島グローバルセンター
センター長 高 選 圭

2011年3月11日以後、福島地域が抱えている課題はグローバル社会の共通のものとなっています。福島は、地震・津波・原発事故だけではなく、住民の移住による人口減少・地域経済の縮小・高齢化・少子化問題・子ども園から大学まで地域教育機関の存続など様々な課題においても世界から注目されています。特に、3・11の復興に関しては世界のモデルになるとも言われています。

気候変動による異常気象は自然災害の頻発をもたらしており、政治・文化・宗教をめぐる対立は社会的不安定や紛争を増加させています。自然環境の不安定さや、社会経済・政治・宗教的不安要因の増加は、自然界だけではなく人間社会にも深刻な影響を及ぼすことを意味します。このような状況を考えると、福島の震災経験やそれを乗り越えてきた復興のノウハウは、グローバル社会に大きく貢献できる貴重な財産であると言えます。

福島が持つこのような財産を共有するためには、積極的な情報発信が必要です。福島からの情報発信は世界から学生、専門家、農業関係者、漁業関係者、企業、技術、新しい知識を呼び込み、それらの交流や協働の中から新しいアイデア・イノベーションが生まれます。世界との資源やノウハウの共有は、地域の活性化に繋がります。これは地域の持続可能性の向上にも貢献するものです。つまり、福島への貢献は世界全体への貢献にも繋がります。

福島学院大学は福島グローバルセンターを設立し、福島地域の学生、専門家、企業、自治体、NPO、住民と世界の様々な地域、企業、大学を繋ぎ、その中から地域活性化を図ることを目指します。福島の復興への参加はグローバル社会へ貢献するチャンスでもありますので、どうぞよろしく願います。

福島グローバルセンターの活動

米国・ハーバード大学 T.H.Chan 公衆衛生大学院

・福島県立医科大学特任教授で、ハーバード大学T.H.Chan公衆衛生大学院の後藤あや教授と同大学院生15名が本学福島駅前キャンパスを訪問。同大学院生が震災復興に関する講義を聴講したほか、文化体験として、県指定重要無形民俗文化財の「金沢黒沼神社の十二神楽（福島市）」を鑑賞しました。

英国・ペトロック大学

・ペトロック大学の訪日研修で、同大学生の福島県内での活動を本学がアテンド。被災地視察や剣道などの文化体験、副知事への表敬訪問、本学学生との交流等を開催しました。



アイスブレイクセッションで交流するペトロック大学と本学の学生

韓国・仁荷（インハ）大学

・共同研究や相互協力に関する覚書を締結しました。
・本学学生が訪韓し、仁荷大学の学生とともに文化体験や観光地を巡りました。



ロッテワールドを訪れた仁荷大学と本学の学生

韓国・東国（トングク）大学

・共同運営授業や学生交流に関する覚書を締結しました。



東国大学と本学の学生が共同運営するフクハブ

・「Capstone Design」授業を利活用した地域課題解決と福島」をテーマに東国大学と共同運営授業を実施。東国大学と本学の学生が共同で「FUKUHUB（フクハブ）福島記憶リポジトリ」を制作し、共

韓国・安東（アンドン）大学

・学生交流、協同研究に関する覚書を締結しました。
・仙台市で安東大学、東北大学、本学の学生が参加する交流会を開催。3大学の学生がグループごとに震災復興に関連したテーマを設定し、課題や解決策などについて意見を交わしたほか、企業訪問も実施しました。



交流した安東大学や本学の学生たち

韓国・慶北（キョンブク）大学

・本学にて、慶北大学との日韓若手研究者交流セミナーを開催。両大学の教員や大学院生、学部生が参加し、「グローバルと地域の融合



セミナーに参加した慶北大学と本学の大学院生と学部生

韓国の5大学を訪問

を「目指して」をテーマに討論や研究報告などを実施しました。
・政治学・政治・選挙・政党・地方議会に関するAI分析についての共同研究が推進中です。

・本学のクラブ「Fukushima Go-Call Act（フクシマグローバルアクト）」に所属する学生4名と顧問で福島グローバルセンター長の高選圭地域マネジメント学科教授が7日間の日程で、韓国の国民、東国、同徳女子、大真、仁荷の5大学を訪問しました。訪問先の大学では、学生が福島県や本学についての発表などを行ったほか、国際会議にも参加。また、現地の学生との食事会や観光地を視察するなど韓国の文化にも理解を深めました。



食事会で交流を深めた大真大学と本学の学生

福島子どもと親のメンタルヘルス 情報・支援センター

フクミック FCMIC 開設



本学は令和6年度、東日本大震災と福島第一原発事故による子どもと親の心の健康への影響について調査研究などを行う機関「福島子どもと親のメンタルヘルス情報・支援センター」FCMIC（フクミック）を新たに設置しました。

フクミックは、福島国際研究教育機構（F・R・E・I・エフレイ）から委託された研究事業を実施しており、親子のメンタルヘルスに関連した実態の調査研究と、そこから得た成果を基にした地域支援、情報発信につなげる活動を展開していきます。

フクミックセンター長の内山登紀夫教授を代表とする研究グループが原発事故による避難の影響を受けた親子を対象に、子どもの発達とその親のメンタルヘルスについて10年以上にわたって調査研究を実施しており、この研究が令和5年度にエフレイの公募研究として採択されました。採択を機に国外の研究機関とも協力し、さらなる実態把握やメンタルヘルス向上に向けた支援の仕組みづくりを進めることを目指します。

【調査研究】

- 1歳半、3歳児における乳幼児健診問診票の分析
- 小学2年生、5年生時点での子育てアンケート(保護者回答)の実施
- 中学2年生、高校2年生時点でのアンケート(本人、保護者回答)の実施

【地域支援】

- 4震災後の各市町村の復興状況や各地域の特性の調査
- 5保護者や支援者向けにメンタルヘルス支援の教材・研修プログラムの開発と社会実装
- 6被災地域の親子やその支援者のためのサロン・交流場の設置

【情報発信】

- 7親子のメンタルヘルスや子どもの発達などに関して、正確な情報発信と正しい知識の普及啓発

南相馬市に拠点開設

令和6年7月25日には、福島県浜通り地方での関連機関との連携体制の強化と広域的な活動を展開するため、南相馬市の小高保健福祉センター内に研究交流拠点「浜通りランチ」を開設しました。同日に行われた開所式では、来賓の門馬和夫南相馬市長、関根昌典福島県相双地方振興局長、山下俊一福島県立医科大学副学長からそれぞれ祝辞をいただき、フクミックセンター長の内山登紀夫教授が浜通りランチを紹介しました。（文中の肩書は当時のもの）



浜通りランチの看板を掲げる内山教授(左から2人目)



令和6年度は福島子どもと親のメンタルヘルス情報・支援センター（フクミック）で実施している研究などに関連したセミナーや特別講義を実施しました。

（文中の肩書は当時のもの）



特別講義(令和6年12月11日)



教育セミナー(令和6年11月13日)

福島国際研究教育機構（F・R・E・I・エフレイ）理事長特別顧問の山下俊一福島県立医科大学副学長を講師に迎え、「福島復興の将来展望」をテーマとした教育セミナーを開催しました。

同セミナーは地域社会に貢献する人材の育成を目的としたもので、卒業年次の学生など200名以上が参加しました。



エフレイの概要などについて講演した山下俊一福島県立医科大学副学長

セミナーでは、山下氏がエフレイの概要や東京電力福島第一原発事故後の課題などについて講話しました。引き続き、フクミックセンター長の内山登紀夫福祉心理学教授がエフレイから助成を受ける研究について説明。学生が震災後の親子のメンタルヘルスの現状と課題について理解を深めました。



セミナーを受講する学生達

本学の福島子どもと親のメンタルヘルス情報・支援センターと共同研究を行っている英国バース大学心理学部自閉症応用研究センターから同学部長のマーク・プロスナン教授と同学部講師のジェフリー・ギャビン博士を講師に迎え、特別講義を実施しました。

プロスナン教授は自閉症における二重過程理論、ギャビン博士は自閉症の人々のオンラインでの交際事情などについてそれぞれ講話しました。心理学や精神医学を学ぶ参加学生にとって、自閉症研究の最先端の知見や研究を学ぶ貴重な機会となりました。



講義いただいたジェフリー・ギャビン博士(右から2人目)とマーク・プロスナン教授(中央)

令和6年度 外部評価委員会開催

〈開催日時〉 令和6年12月2日 〈開催場所〉 宮代キャンパス

本学の教育研究等の状況について自己点検し、優れている点や改善点などをまとめた自己点検・評価を第三者の視点で検証する「外部評価委員会」が開かれました。同委員会では、大学や組織の運営に関する見識者の方々に委員に委嘱し、本学の教育と研究の質の向上・改善に向けた提言をいただきました。

委員会では、「実践力を育む教育」につながる取り組みや附属機関の開設など令和6年度の本学の活動や自己点検・評価報告書の概略についての説明が行われました。その後、当日出席した委員5名から大学運営に係るご意見や、学部の学修内容や学生募集に関連した質問をいただきました。

終盤には、令和6年度に新設した「福島グローバルセンター」について、センター長の高選圭地域マネジメント学科教授がセンターでの国際関係活動について紹介しました。（文中の肩書は当時のもの）



委員長・鈴木弘行氏 （福島県立医科大学理事）

「昨日、教育力を高めることと地域連携が、地域における大学にとって重要とされている。教育力を高めるためには、教学マネジメントの重要性が高まっており、3つのポリシーを定め、それに沿ってカリキュラムを遂行することに加え、定期的な見直しを行いPDCAサイクルを回していくことが非常に重要となる。これらを下支えするものが、IR（インスティテューショナル・リサーチ）やFD（ファカルティ・ディベロップメント）、SD（スタッフ・ディベロップメント）の取り組みとされている。教員向けのFD、職員向けのSDでは視点が若干異なるが、教職員が同じ方向を向いていかなければいけない。貴学ではどのように方向性をプラニングして年間のFD、SDを実施しているのか伺いたい。また、私はFDとSDを同期させていくことの難しさを感じているが、その点について貴学の取り組みがあれば教えてほしい。」

回答・大学担当者

SDは教員、職員全体を対象に考え、大学で課題になっている点を中心に研修を実施している。プラニングについては、前年度の1月から検討をはじめ、年度内には具体的な内容について

決定している。

回答・大学担当者

何をFD研修として実施していくかというところで、教員に「何を必要としているか」というアンケートを実施し、回答の中から多く上がったものや必要と考えるものを委員会できりまとめ、FD実施につなげている。学科単位でもFDを実施しており、学科が求めるものともすり合わせを行い、今後につなげていきたい。

鈴木氏

FD、SDについて組織的に取り組んでいることが分かった。学部、学科ごとの課題が個別にあり、そこに大学全体としての方向性を合わせていかなければいけない。横串をどのように挿していくかが大変だと思うが、引き続き、学内で検討し取り組みを進めてほしい。

委員・日下部達氏 （東北電力株式会社執行役員福島支店長）

令和5年度の報告書について、大学と短期大学の報告書を分冊にするなど公開情報の充実が図られており、それぞれの取り組みについても進化・深化していることは評価できる。大学機関別認証評価で適合認定を受けたことは、大学の組織運営や研究教育活動が適切に行われていることが認められた結果。今後も改善を継続して、さら

防止策を周知してもらいたい。

委員・菅野啓二氏 （福島県農業協同組合中央会代表理事会長）

6月の「あしたの食卓」では、福島学院大学をはじめ、各社皆さまに協力いただき、大変嬉しく思う。学外で食に関する学びを実践することは、参加してくれた学生にとって貴重な体験になったと思う。このような機会を多く設けることで学生が地域とのつながりを実感し、自分も地域で生きようとする思いが強くなるのではないかと考える。若い人たちに福島に定着してもらうには、自分が勉強してきたものを活かせる就職先を知ってもらうために、行政・企業側と大学側それぞれで地域での就職に関する情報を発信するなど、双方の取り組みが必要になると考える。経営面では学生募集に関して、定員充足率の状況から良い見通しが立たない状況にあると推察する。入学者の約8割が県内出身と聞いたが、立派な施設や環境を持つ大学を県外にも積極的に発信し、県外からの入学者を増やすことが重要だと考えている。

委員・大村雅恵氏 （天和自動車交通株式会社代表取締役社長）

※当日欠席のため、事前に意見書を拝受。

大学理念「学生第一」と「地域になくてはならない」の2点を具現化するため、特に地域との連携強化に期待している。実践力につながる学びを大切に、「ふくしまならではの学び」から地域社会の諸問題を多用な視点から取り組むマネジメント学部の新設等、地域貢献を視野に教育の充実をはかるという大学の姿勢は高い評価を得るものと考えている。地域の課題に、様々な機会をとらえてきめ細やかに取り組み、またこれを福島学院大学の卓越した独自の取り組みとして位置づけ、マスクミ等を通して多くの県民に届けようとする努力を重ねていることは高い評価を得られるものと確信している。今後も自治体や地域の企業との連携プロジェクトを推進し、地域のニーズへのきめ細やかな対応を特徴として、大学の独自性、卓越性が表現できる取り組みを充実させてほしい。

なる大学の改革に挑戦してほしい。また、認証評価で指摘された改善事項については、令和6年4月1日施行で規程等が整理されているうえ、改善報告書として公開されている点は、迅速な対応が図られており素晴らしいと思う。また、参考意見として挙げられた事項についても対策の検討をお願いしたい。

委員・渡邊艶子氏 （福島看護専門学校理事）

地域の方々と連携した活動や学びについて、資料などに詳細に記載されており感動した。新聞を見ても福島学院大学が出てこない日はないと感じるほど、様々なマスコミで活動などが取り上げられている。これほどの活動が展開されているのは、やはり連携がとても良いのだと思う。現在は、福島看護専門学校非常勤講師として、福島学院大学から先生方を紹介してもらっているが、貴学の地域への貢献度が高いと感じている。今日の新聞一面に掲載されていた防災士について、今後、防災士が地域で活躍していくと思うが、防災は、専門家だけでなく地域住民が手を差し伸べることができる身近なもので



鈴木弘行氏



日下部達氏



渡邊艶子氏



尾崎和典氏



菅野啓二氏



■ 私のライフワーク ■

私のライフワークであり、いつも仕事の根幹にあるのは「子どもの健康」支援です。

私はこれまで看護師や助産師として働き、現在は教員をしています。私が助産師になろうと思った動機は、新人看護師として新生児集中治療室で勤務をしていた時に、小さな赤ちゃんが亡くなるのを見て体験からでした。身内で高齢の祖父が亡くなった経験もありましたが、小さな命が消えていくのは大きな衝撃でした。そこで私は「子どもが元気に産まれて健やかに育つために、妊婦さんが安全なお産を出るようにしたい」と考えて助産師になりました。

助産師になってから約30年間は妊娠・出産に関わる周産期病棟や外来で働き、その間にJICA専門家として地域母子保健に関わる国際協力の仕事などもしました。その後、大学の教員となり看護学・助産学・子ども学・保育学の教育に携わっています。

■ 教育活動 ■

私が担当する授業は、子どもの健康と保健に関連する科目です。

1年次生に必ず確認することは「健康とは？」です。実際の生活の中で、健康を身体的と精神的、社会的な視点

で捉えて支援し、統合して評価できるように目指しています。「自分らしく、自分で自由に選択して行動できているか(精神的)、他の人・物とつながっているか(社会的)」などを指標として、生活を具体的に評価する授業は活発に意見が出されます。

子どもの身体については、解剖・各器官の機能発達と健康・病気を関連付けて理解できることを目指しています。「なぜ、子どもは中耳炎になりやすいのか?」「なぜ、話しながら食事をすると誤嚥しやすいのか?」など、子ども特有のメカニズムを理解することが重要と考えています。

2年次生が本番さながらに真剣に取り組むのが乳幼児の救急蘇生法です。心臓が止まったヒトは3分間放置すると50%の確率で死亡すると言われていたため、発見したその場にいる者の対応が重要です。宮代キャンパスの近所にある飯坂消防署出張所のご厚意により複数個の心肺蘇生訓練人形や自動体外式除細動器(AED)のトレーニングキッドを借用して練習します。教室で学んだ基礎知識を生活の現場で応用出来ることを目指しています。

■ 研究活動 ■

私が行っている子どもの健康支援の柱は健康教室です。助産師・教員として働きながら保育施設や小学校、中学

校、高等学校で行ってきました。そこで私の研究テーマはその教育効果の検証です。「高等学校における共感性の向上プログラム」の研究では、高校生のプログラム受容が良かったことや共感性の向上に効果があったことが分かりました¹⁾。また、高校生対象の「将来の妊娠・出産・育児に関する意識調査について」の研究では、妊娠計画に自信のある人は、出産に対して自信があり、育児を楽しみにしていることが分かりました²⁾。これらの研究の結果を踏まえて今後も子どもの健康教室の改善と実施に努めていきます。

しかしながら、令和5年版犯罪白書によると児童虐待に関わる事件数は減少せず、子ども虐待による死亡事件の件数は、1週間に1名以上¹⁾であり、その加害者の約40%が実母、約10%が実父でした。この現実を報告書で知ると、私の活動や研究には意味はあるのかと打ちのめされる気持ちになります。しかし、目の前の子ども達とその保護者が健やかに生活できるように微力ではありますが実践と研究を続けていきます。

■ 地域貢献活動 ■

福島学院大学では多くの地域貢献活動が実践されています。論文や成書のまとめから学ぶ事は往々にして社会の過去の事象です。ですから社会の「今」

を学ぶには地域へ出て行って自分の知りたい分野の活動に携わることが重要と考えます。地域でその現場の方々と活動する事で教室での学びの確認や課題対応の能力強化になります。加えて、協働することでお互いをよく知り合い、人と地域のつながりを強めています。

私は学生と一緒に大学に依頼された子どもの交流イベント等に参加してきましたが、学生達は積極的に来場者へ声を掛け担当の活動を主体的に行っていました。来場者の方々の満足度調査はしていませんが、学生担当ブースの来場者の多くが笑顔でした。また、イベント主催者が毎年福島学院大学へ協力依頼を申し込んでくること自体も当大学と学生に対する信頼の評価であると確信しています。これからも、地域と学生・教員が「win-win」となる地域貢献を目指して活動を続けてまいります。

- 1) 柴田俊一編著、渡邊一代ほか：産前からの親準備教育のススメ。明石書店。117-132, 2024.
- 2) 渡部蒼依、後藤あや、渡邊一代：高校生を対象とした妊娠・出産・育児に対する意識と関連する要因—福島県内の一高校における横断研究—。厚生学の指標 72(2). 2025.



子ども学科 教授
渡邊 一代 KAZUYO WATANABE

福島県福島市出身
【学歴】

福島県立医科大学大学院：博士(医学)
福島大学大学院：地域政策科学修士
福島大学：社会学士
日本赤十字武蔵野女子短期大学：看護学、助産学

【所属学会】
日本助産学会、日本母性衛生学会、日本学校保健学会

【職歴】
新宿／武蔵野／福島赤十字病院：周産期センター、訪問看護に従事。
独立行政法人国際協力機構：モルジブ、ベトナムにて母子保健行政、助産・看護教育。
福島県立医科大学：看護師・助産師養成教育。

私の専門分野は、子ども家庭福祉分野の主に保護者支援であり、ほかに保育、子育てに関する制度や保育全般にわたる内容を研究範囲にしています。

私は大学卒業後、保父（現在呼称では男性保育士）として6年間、その後保育園長として18年間民間保育所で勤務しました。その間、保育団体役員として、現任の保育園長や保育士の研修を担当したり、児童・民生委員として地域福祉活動の実践を積んだりしました。中でも、保護者支援・保育相談支援については、2011年から保育士必修科目の「保育相談支援」「子育て支援」を担当し、現在も福島・山形・岩手の東北3県の「保育士等キャリアアップ研修」「保護者支援・子育て支援」領域を担当しています。

現在、子ども家庭福祉の領域が抱える大きな問題のひとつに「児童虐待」があります。家庭内における大人から子どもに対する心身への暴力行為などの人権侵害が「児童虐待」であり、身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待に分類されています。この虐待は、家庭内にとどまらず児童福祉施設内でも起きており、大変痛ましい状況になっていきます。これが「不適切保育」です。この不適切保育を行っているのが、保育士国家資格を持つ保育者であったり施設長であったりと、目と耳を疑うニュースが頻繁に流れてきま

す。この不適切保育をしてしまった保育者も、保育者になりたての頃には、子どもに優しい、保護者想いの誰にでも好かれる保育者であったと思うのです。しかし保育という仕事や、先生と呼ばれることに慣れ過ぎてしまい、子どものため、保護者のための仕事であることを忘れてしまったため、起こってしまったのではないかと考えるのです。それは子どもや保育が苦手という人が、保育者という職種に就くことは考えにくいからです。このように考えると、不適切保育は、保育者や園長の個人の問題として捉えるだけではなく、職場や家族、交友関係などの人間関係と、勤務施設と他の関連機関との連携などなど枠を広げて捉え、再発防止に努めねばなりません。保育者は子どもに対する保育と、保護者に対する子育て支援の両方を行うことが法的に規定された職務です。子どもとのかかわり方がわからない親に対する支援も保育者、保育施設の役割になっていきます。つまり「児童虐待」を予防することが「保護者支援・子育て支援」の担うところにもなっているのです。

また、子どもの貧困は、子どものいる家庭の貧困であると同時に、子どもの成長発達、命の保障の問題にもかかわります。子どもの貧困問題は、「子ども食堂」の活動が報じられたことから社会に関心を持たれるようになりました。「子どもの未来応援国民運動」の基金による支援、支援を必要とする民間団体のマッチングなどの事業推進により、いまではフードバンク事業も盛んになり、地域のスーパーや食品メーカーの協賛を得て、社会福祉協議会やNPOなどが子どものいる家庭に、食品の提供をしています。こうして衣食住の「食」を保障する取り組みが全国に広がっています。「子どもの貧困」問題は、貧困の連鎖を断つことが大きな目的です。「食」の保障により、子どもとその家族の健康を守ることが可能になります。また、「子どもの貧困」問題対策として、「子どもの生活・学習支援事業」の拡充も取り組まれています。事業の概要は、①基本的な生活習慣の取得支援や生活指導、②学習習慣の定着等の学習支援、③食事の提供の3つを組み合わせて実施することになっていて、「子ども食堂」のほか、児童館・公民館・民家などの子どもの居場所を確保し活用することを前提としています。こうした子どもの居場所をつくるのも、子どもの居場所で働くのも保育者に期待される役割のひとつ

といえるでしょう。子どもに関する問題である「児童虐待」や「子どもの貧困」などに、直接支援していくのが保育者です。福島学院のこども学科と保育学科では、対人援助職でもある保育者養成をとおして社会貢献をしています。保育者の待遇面でのネガティブ報道も影響し、保育者を目指す人が減っていることも事実ではありますが、国費を投じた様々な処遇改善も行われ、ここ数年で待遇は改善されてきています。

児童に対する養護と教育を一体的に行う保育は、子どもの人生に大きな影響を与えるとても大切な仕事であり、保育者は保護者に対して、子育てに関する相談支援を行う重要な役割を担っています。その社会的にも重要な役割を担う保育者を、1966年以来50年以上宮代キャンパスで養成しているのが福島学院大学なのです。本学保育者養成課程の個性あふれる教職員と一丸となって、個性豊かな学生を育て、巣立っていく姿を見守ることが大学教員としての喜びです。保育現場での経験を重ねた卒業生と保育を語り、ともに保護者支援や保育内容の充実、地域の子育て環境の整備について、いつでも、いつまでも頼られる存在であるためにも、これからも保育研究に邁進してまいります。



KIYOTAKA KON

保育学科 教授
今 清孝 KIYOTAKA KON

平成26年 東北福祉大学大学院総合福祉学研究所社会福祉学専攻博士課程単位取得後退学
昭和59年 筒井福祉会筒井保育園 保父(平成2年3月まで)
昭和62年 副園長(平成2年3月まで)
平成2年 園長(平成20年6月まで)
平成25年 東北文化学園専門学校 非常勤講師(平成26年3月まで)
平成26年 近畿大学豊岡短期大学こども学科 非常勤講師(平成26年3月まで)
平成26年 福島学院大学短期大学部保育科第一部 講師(平成28年3月まで)
平成28年 福島学院大学福祉学部こども学科 講師(平成29年3月まで)

平成29年 福島学院大学福祉学部こども学科 准教授(平成31年3月まで)
平成31年 福島学院大学福祉学部こども学科 教授 こども学科長兼任(令和3年3月まで)
令和2年 福島学院大学福祉学部こども学科 実習指導室長兼任(令和3年3月まで)
令和3年 青森中央短期大学部幼児保育学科 非常勤講師(令和6年3月まで)
令和4年 学校法人福島学院 監事(令和6年2月まで)
令和5年 八戸学院大学短期大学部幼児保育学科 教授(令和6年3月まで)
令和6年 福島学院大学短期大学部保育学科 教授(現在に至る)

ふくしまを育む

「あしたの食卓」

福島県産食材を使用した料理を味わう1日限りの特設レストラン「ふくしまを育む『あしたの食卓』」が令和6年6月21日、福島市飯坂町の摺上亭大鳥で開かれ、短期大学部食物栄養学科の学生が料理の盛り付けや配膳などに協力しました。

イベントは、福島民報社と福島県立医科大学が連携して取り組む「健康ふくしまプロジェクト」の一環で、福島県の共催、JAグループ福島の特別協賛、摺上亭大鳥の協力。初開催された令和5年度には、本学の宮代キャンパスを会場に2度開かれており、初回から同学科の学生が配膳などで協力参加しています。



イベント当日、料理の配膳に臨む学生

赤井総料理長から食材の下準備についてアドバイスを受ける学生



イベントに協力した食物栄養学科の学生と教員ら

今回は摺上亭大鳥の赤井圭三総料理長が腕をふるったコース料理10品や県産日本酒が来場者に提供されたほか、食事に先立ち講演会が開催されました。学生はイベント当日に加えて、前日の食材の仕込みにも参加。赤井総料理長からアドバイスを受けながら野菜の飾り切りや貝の下処理、マグロの昆布締めに取り組むなど、一流料理人から調理技術を教えていただく貴重な経験を得ることができました。

活動の様子や料理を写真で紹介します。

参加者に振る舞われた「あんぼ柿ジェラート」「さくらんぼクリームチーズ」



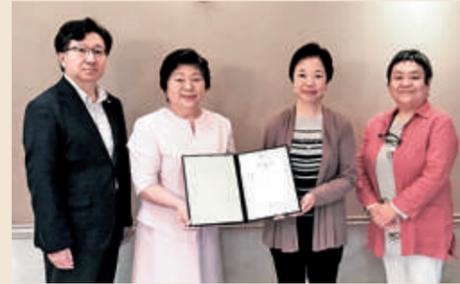
Menu

- 前 菜：アスパラと鱈フライのサラダ
- 小吸物：ひすい豆腐
- 御造り：本まぐろ昆布ベ土佐醤油
- 口直し：トマトゼリー
- 強 肴：福島牛たん わさび餡かけ
- 主 菜：福島牛たたきに福島の恵みを添えて
- 御食事：北寄貝めし
- 御 椀：焼き茄子と滑子の味噌汁
- 香の物：キャベツ 新生姜
- 水菓子：あんぼ柿ジェラート、さくらんぼクリームチーズ

福島学院大学 特別招聘 客員教授の紹介

特別招聘教授に
ハーバード大学「H.Chan
公衆衛生大学院の後藤教授

令和6年7月9日、福島県立医科大学総合科学教育研究センターの特任教授で、ハーバード大学「H.Chan 公衆衛生大学院国際保健・人口学講座、武見国際保健プログラム」の後藤あや教授に本学の特別招聘教授に就任いただきました。令和6年度は、本学の福祉学部子ども学科と短期大学部保育学科の学生を対象に、こどもの保健や情報リテラシーに関する講義等を実施していただきました。令和7年1月12日には、後藤教授が同大学院の大学院生15名を引率し、福島駅前キャンパスを訪問されました。また、後藤教授は本学教員と育児支援などに関する共同研究を進めており、



令和7年2月には、福祉学部子ども学科の渡邊一代教授とともに、アメリカ6つの州に在住する母親や育児支援者を対象としたウェブ上での講座を実施しました。

客員教授に
和食料理人 野崎さん

令和6年8月28日、和食料理人・野崎洋光さんに本学客員教授を委嘱いたしました。令和5年6月に本学で開催された福島県産食材を使用した料理を提供するイベント「ふくしまを育む『あしたの食卓』」で、野崎さんが料理の腕を振るわれたことをきっかけに、客員教授を委嘱させていただきました。野崎さんからのアドバイスの下、本学短期大学部食物栄養学科の学生が調理補助や盛り付け、配膳などに協力しました。委嘱当日には、県北集団研究会の特別調理実習会が宮代キャンパスで開かれ、野崎さんによる調理の実演や講演などが行われました。



客員研究員

客員研究員とは

福島学院大学は、地域の学術の発展に貢献するため、高度な研究に従事しようとする学術研究者や、地域連携センターの取り組みに協力し、その活動をより深化させていただける研究者、企業の方、地元の方々から客員研究員として就任いただき、その研究活動を支援しております。

【客員研究員一覧（順不同・敬称略・肩書は委嘱当時のもの）】

福島県会津地方振興局 局長 岡 文 浩	土湯温泉観光協会 前会長 渡 辺 和 裕	AC福島ユナイテッド 代表取締役 鈴 木 勇 人
アルテマイスター株式会社 保 志 康 徳 代表取締役社長	ふくしま「農」を考える会 会長 菊 田 透	福島民報社 いわき支社長 鞍 田 炎
末広酒造株式会社 代表取締役社長 新 城 猪 之 吉	ふくしま土壤ネットワーク 代表 高 橋 賢 一	福島県歯科医師会 会長 海 野 仁
割烹・会津料理 田 季 野 女 将 馬 場 由 紀 子	福島県指導農業者会 監 事 新 妻 良 平	福島県看護連盟 会長 本 内 敦 子
株式会社福島中央テレビ 代表取締役社長 五 阿 弥 宏 安	飯坂温泉乙和会 会長 嶋 ひ で 子	福島県薬剤師会 会長 町 野 紳
福島県理容生活衛生同業組合 理事長 中 野 竹 治	高湯温泉吾妻屋旅館 女 将 遠 藤 玲 子	ジャーナリスト 菅 沼 栄 一 郎
福島県美容生活衛生同業組合 福島支部長 木 下 博 幸	土湯温泉土湯女将会 会長 渡 邊 い づ み	ソウル市立大学 李 鎮 遠
福島県生活衛生営業指導センター 大 島 正 敏	福島民友新聞社編集局 局長 小 野 広 司	福島県薬剤師会 専務理事 直 籠 晋 一
福島民報社 代表取締役社長 芳 見 弘 一	女優・二本松観光大使 大 山 采 子	韓国東国大学 教 授 金 亨 昊
飯坂温泉旅館協同組合 理事長 紺 野 正 敏	金水晶酒造店 代表取締役社長 斎 藤 美 幸	
高湯温泉観光協会 会長 遠 藤 淳 一	聖光学院高等学校野球部 監督 斎 藤 智 也	

福島県教育委員会

●●協定締結●●令和4年11月



連携事業として令和5年度から県内の保育者や小学校教員などを対象に子どもの発達の課題への支援や指導の在り方について、県教委と本学両者の知見を活かした研修会を開催しています。令和6年度は全4回開催され、本学教員が発達障害のある子どもへの対応などについて講話しました。また、小学生に県政への理解を深めてもらうことを目的とした「県庁にみんなの声を届けよう!」プロジェクトでは、本学大学院生と学生計7名がボランティアとして参加し、小学生が意見交換するグループワークの補助などに協力しました。

福島県立医科大学

●●協定締結●●令和2年1月

令和6年9月5日に福島県立医科大学光ヶ丘キャンパスで開催された福島医学会学術研究集会シンポジウム「子宮頸がんを防ぐために～これからの私のために今できること」で、パネルディスカッションに福祉心理学科の学生2名がパネリストとして参加しました。参加した学生は、福島県立医科大学、桜の聖母短期大学の学生とともに、子宮頸がんやその検診、ワクチン接種などに関して学生視点の意見を発表しました。



福島民報社

●●協定締結●●平成28年2月

福島民報社と福島県立医科大学が連携して取り組む「健康ふくしまプロジェクト」の一環として開催されている1日限りの特設レストラン「ふくしまを育む『あしたの食卓』」に、食物栄養学科の学生が配膳や調理補助で参加しています。これまでに全3回開催されており、初回は和食料理人の野崎洋光氏、第2回は八芳園（東京都）元料理長の柿迫太陽氏、

第3回は摺上亭大鳥（福島市）総料理長の赤井圭三氏の一流料理人3名が各回で料理の腕を振るいました。



福島信用金庫

●●協定締結●●令和2年12月

福島信用金庫の紹介を受け、同信金と聖光学院高校、桑折町SDGs推進町民会議が取り組む「桑折町SDGsミライかるた」の制作に本学学生が参画しました。かるたには、SDGsの視点から、同町のより良い未来づくりに向けた課題の解決策などについて記載されています。学生は、高校生とともにグループワークを通してルール検証などを行いました。



ACTIVITY REPORT

福島学院大学 地域連携センター

活動報告

～「地域で学び地域に学ぶ」～

本学の地域連携拠点「地域連携センター」は平成31年度の設定以来、多くの企業・団体との協働による多くの事業を展開してきました。今後も「地域に根差し、地域になくはない大学」を掲げ、連携事業を通じた地域貢献と大学資源の“見える化”を図るとともに、実践力を養う機会を学生に提供してまいります。（文中の肩書は当時のもの）

宮城県角田高等学校

●●協定締結●●令和6年5月9日

宮城県角田高等学校と高大連携協定を締結しました。本協定は教育・研究をはじめとする幅広い領域に

おいて、学生・生徒および教職員間の交流と連携を通じて、より魅力ある大学と高等学校づくりを目的としたものです。



具体的には、同校での授業「総合的な探求の時間」発表会時の本学教員からの助言・指導、本学施設での学外授業の実施などを想定しています。両者で学生・生徒一人ひとりの興味・関心に応じた発展的、協同的な学びを促進させることで、学校教育の振興と地域社会の発展に寄与していきたいと考えています。

宮代キャンパスで行われた締結式には、井上健一校長はじめ関係者が出席し、協定書への署名などが行われました。

阿武隈急行株式会社

●●協定締結●●令和6年9月5日

福島駅（福島市）と槻木駅（宮城県柴田郡柴田町）を結ぶ鉄道「阿武隈急行線」を運行する阿武隈急行株式会社と、沿線地域の発展などを目的とした連携協定を締結しました。人的・知的資源の交流を図り、同社が進める地域活動への参画や路線の利用促進に向けた活動を展開します。

団長を務める黒須大輝さん（当時地域マネジメント学科2年）も式に同席しました。

同路線は、多くの学生と教職員が通学・通勤に利用しており、本学にとって重要なインフラとなっています。令和7年1月には同社と福島市、本学の3者が連携したプロジェクトが開始し、利用促進を目指した調査研究を共同で行っていきます。

協定締結式は宮代キャンパスで行われ、同社の富田政則社長をはじめ、沿線自治体の住民有志で組織する「あぶきゅう応援団」の



南会津高校、南会津町

●●協定締結●●令和6年3月

南会津高校の探求の授業「南会津学」に本学の学生と教員が参加。発表会での講評等への講師派遣のほか、高校生と学生による探求学習について意見交換会や南会津町周辺地域でのフィールドワークを実施しました。



伊達市

●●協定締結●●平成28年7月



伊達市と福島信用金庫の連携協定に基づく事業として、伊達市役所で実施されたセミナーで、地域マネジメント学科の茨木瞬講師が講師を務めました。人口減少から生じる様々な課題への対策について、他の自治体での事例なども踏まえながら解説しました。

AC福島ユナイテッド

●●協定締結●●令和3年12月



写真提供：©FUKUSHIMA UNITED FC

福島学院大学認定こども園で、福島ユナイテッドFCのアカデミースタッフを講師に招き、園児を対象に「運動遊び」を実施。また、昨夏行われた福島ユナイテッドFC公式戦の「手話応援デー」では、手話勉強会「紡」の学生が手話のデモンストレーションを行いました。

浪江町

●●協定締結●●令和3年3月

町のにぎわい創出などを目的としてコスモスガーデンの整備に取り組んでいます。令和6年度で活動4年目を迎え、学生が浪江町や町内企業の皆さんと協力してコスモスの種付けやサツマイモの苗植えに臨みました。



飯坂温泉観光協会

●●協定締結●●令和元年6月

飯坂温泉PRキャラクターの温泉むすめ「飯坂真尋ちゃん」の声優イベントや「飯坂温泉日本一の桃まつり」など、学生が各種イベントの運営に協力しました。



よい仕事おこしフェア実行委員会

●●協定締結●●令和5年2月

令和6年12月3、4日に東京都で開かれた「よい仕事おこしフェア2024」に参加しました。会場に本学のブースを設置し、同実行委員会をはじめとする様々な団体・企業との地域連携事業や本学の国際交流拠点「福島グローバルセンター」の取り組みなどを発信しました。



土湯温泉観光協会

●●協定締結●●平成28年12月

主な実績 ●フリーマガジン「若旦那図鑑」の制作、土湯温泉の夏イベント「ミズベリングつちゆ」の企画・運営など

福島県食品生産共同組合

●●協定締結●●令和元年11月

主な実績 ●栄養成分測定器「カロリーアンサー」による食品栄養成分分析協力

いちい

●●協定締結●●令和2年12月

主な実績 ●「大わらじ福かつ弁当」のパッケージデザイン、連携授業の実施など

福島地域酒米研究会

●●協定締結●●令和3年12月

主な実績 ●福島産酒米使用日本酒のブランディング協力、日本酒販売会でのPR協力など

ふくしま三大ブランド鶏推進協議会

●●協定締結●●令和4年9月

主な実績 ●三大ブランド鶏食べ比べ試食会の開催、「ふくしま三大鶏フェス」への出店など

NPO法人結倶楽部

●●協定締結●●令和2年7月

福島市飯野町で栽培されている梅「露茜（つゆあかね）」を使用した梅酒のラベルのデザイン制作やPR活動に学生が参画しています。令和6年度は本宮市の大天狗酒造で開かれた新酒お披露目会で、参画する学生と教員が会場での司会や販促などに協力しました。



トラック運転手のための弁当を考案

連携先 ● 福島県トラック協会

活動 ● 「ヘルシーかつボリュームのある弁当」をテーマに、食物栄養学科の学生たちが8種類の弁当レシピを開発。学生によるプレゼンテーションや試食会を行いました。



巨大ニンニクの植え付けに参加

連携先 ● UFOのエレphantガーリックとなかまたち

活動 ● 福島市飯野町で栽培されている巨大ニンニク「UFOのエレphantガーリック」のプランディングのほか、学生が収穫や植え付け作業に参加しています。



地元経営者と学生が意見交わす



連携先 ● 福島県中小企業家同友会福島支部

活動 ● 若者に届く求人方法や福島市におけるまちづくりなどについて、経営者と地域マネジメント学科の学生がそれぞれの立場から意見を交わしました。

福島市土船地区のまちづくりプロジェクトに参加



連携先 ● 福島地域福祉ネットワーク会議、社会福祉法人青葉学園、福島市立水保小学校

活動 ● 地域と子ども協働による行事「水保プロジェクト」の準備、運営に、地域マネジメント学科の学生が協力したほか、ハロウィンランタン祭りも開催しました。

子どもとの交流イベントを開催

連携先 ● 福島市商工観光部にぎわい商業課

活動 ● 福祉心理学科の学生が中心となり企画・運営した、地域の子どもや保護者との交流イベント「第3回にじピアリビング子ども広場」を開催しました。



水源ポンプ所跡地の利活用へ

連携先 ● 福島市北信支所、余目地区自治振興協議会

活動 ● 福島市の宮代水源ポンプ所跡地の利活用について、地域住民の方々と学生との意見交換会を実施。跡地を活用し、世代間交流等を目的としたお花見会を開きました。



担い手不足の地域の祭りに協力参加



連携先 ● 松川町原東町内会

活動 ● 若い世代の担い手不足の話を受け、地域マネジメント学科の学生が約1か月の稽古を経て、囃子や山車引きとして祭りに参加しました。

古民家カフェの空き部屋の活用提案



連携先 ● 大波会

活動 ● 福島市大波地区の「古民家Café imoca」の空き部屋活用に向け、視察や地域の方々との意見交換、活用法提案プレゼンなどを実施。現在は、学生が交流スペースの制作などに取り組みました。

東北映像フェスティバル学生部門で優秀賞

食物栄養学科の菅田清正教授の特別研究を履修する学生3名（令和5年度卒業2名、同6年度卒業1名）が制作した映像作品が、「東北映像フェスティバル2024」の映像コンテスト学生部門で大賞に次ぐ優秀賞を受賞しました。優秀賞の受賞は2年連続。受賞作品のタイトルは「百年の想い～あんぱ柿発祥の地、伊達市五十沢地区」。あんぱ柿の生産農家の想いや生産過程などを丁寧に紹介した約4分30秒の映像作品です。令和6年5月30日に仙台市で行われた表彰式では、高橋晴斗さん（令和6年度食物栄養学科卒業）が学生を代表して表彰を受けました。



人材寄付講座を開催



「地域活性化と人材育成」
女優・二本松観光大使 大山采子さん
令和6年10月8日

「私の復興支援!～いつも誰かの応援団～」
城南信用金庫(東京都)相談役 川本恭治さん
令和7年1月10日



本学は地域の振興と活性化を目的に企業や団体、官公庁などと連携し、各分野のスペシャリストを講師に迎える一般市民向けの公開講座を開講しています。令和6年度は女優で二本松観光大使の大山采子氏、城南信用金庫（東京都）相談役の川本恭治氏を講師に迎えた人材講座を開催しました。令和6年10月8日に大山さんが「地域活性化と人材育成」、令和7年1月10日に川本さんが「私の復興支援!～いつも誰かの応援団～」と題して、それぞれ講演いただきました。

市議会議員と学生が意見交換

令和6年11月5日、福島市議会による議会報告会・意見交換会が宮代キャンパスで開かれ、地域連携活動を踏まえたJR福島駅前の活性化や学生支援、高等教育の充実などについて、学生と市議会議員の皆さんが意見を交わしました。学生が市議会に触れるとともに、福島市に求めることや期待することなどを意見として、市議会議員に提案できる貴重な機会となりました。



語り部招き特別講義



令和6年7月31日、マネジメント学部地域マネジメント学科の授業「福島と復興」で、NHK福島放送局「語り部クロス」の協力を得て、語り部の方々を講師にお招きした特別講義を実施しました。当日は、長崎で原爆体験の継承活動に取り組む平由布子さん、福島で震災・原発事故の語り部活動を行う小泉良空さんによる講話、2人によりクロストーク、学生を交えたグループディスカッションを実施。「記憶」を伝える必要性などについて語り部の方と学生が意見を交わしました。同日の特別講義の開催にご尽力いただいたNHK福島放送局の武田健太アナウンサーにも会場にお越しいただきました。

TOPICS

トピックス

本学で全国規模の学術研究集会、研究討論会開催

令和6年度は本学で全国規模の学術研究集会と研究討論会が開かれました。それぞれ全国各地から多くの関係者が集い、講演会やシンポジウム、分科会などが行われました。各会ともに、本学の学生がボランティアとして事前準備や当日の運営に協力したほか、本学主催で参加者に東日本大震災、原発事故の被災地を視察していただくエクスカージョンを実施しました。

全日本ろうあ連盟青年部

令和6年11月2～4の3日間、「全国ろうあ青年研究討論会inふくしま」が開催され、聴覚障害者とその関係者が社会福祉の向上を目指して交流を深めました。福島県では50年ぶりの開催で、約280名が参加しました。福島県聴覚障害者協会の吉田正勝会長、小林靖事務局長が福島県におけるろうあ運動や聴覚障害者情報支援センターの活動について講演したほか、東日本大震災に関連した手話劇が披露されました。



日本精神保健福祉学会



令和6年6月29、30の両日、東北地方で初開催となる学術研究集会が開かれ、参加者が被災者支援の現状や課題などについて理解を深めました。会には約150名が参加。初日は、テーマの「復興の現在“知”と展望～東日本大震災におけるソーシャルワーク実践の継承～」に関連したワークショップをはじめ、県内の医療・福祉関係者による記念講演やシンポジウム、2日目は自由研究発表などが行われました。

絵本作家の企画展で人形劇披露

令和7年1月25日～同年3月9日に福島県立美術館で開かれた企画展「かがくいひろしの世界展」の一環として、会期中の2月22、23の両日、本学こども学科の学生3名が福島大学の学生たちと合同で人形劇を上演しました。絵本「だるまさん」シリーズで知られる絵本作家かがくいひろしさんがファンだった人形劇団の方の指導の下、学生が人形制作や稽古に励み、かがくいさん創作の人形劇「だちょうの卵」や、学生がかがくいさんの想いに考えを巡らせながら創作したオリジナル作品を披露しました。





メディア懇談会

福島学院大学が目指す“大学の見える化”を図るため、報道関係者の皆さまを本学に招き、大学の取り組みや教員の研究を紹介しております。
令和6年度は全9回の懇談会を開催いたしました。

第1回 令和6年4月26日

研究発表者 遠藤 哲哉(地域マネジメント学科教授)

第2回 令和6年5月31日

研究発表者 木村 陽子(地域マネジメント学科教授)

第3回 令和6年6月21日

研究発表者 成川 且人(地域マネジメント学科講師)

第4回 令和6年7月19日

研究発表者 鳥飼 裕一(地域マネジメント学科教授)

第5回 令和6年9月20日

研究発表者 田川 寛之(地域マネジメント学科助教)

第6回 令和6年10月18日

研究発表者 高 選圭(地域マネジメント学科教授)

第7回 令和6年11月29日

研究発表者 佐藤 則行(福祉心理学講師)

第8回 令和7年1月31日

研究発表者 小島 有里子(福祉心理学講師)

第9回 令和7年2月28日

研究発表者 千葉 浩太郎(福祉心理学講師)



同窓会から本学へ寄付金 令和6年9月12日



元同窓会長の高荒正子様から
絵本などの図書の寄贈
令和6年5月21日

令和6年度も団体、個人の皆さまから図書や寄付金など、温かいご支援をいただきました。
ご寄付いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

支援品寄贈



NPO法人結倶楽部様から
お米の寄贈
令和6年9月24日

※贈呈式を執り行わなかったため、恐縮ですが、文章のみでの掲載とさせていただきます。



NPO法人ハート・オブ・ゴールド様からお米の寄贈
令和7年3月18日



瀬戸内寂聴を偲ぶ会の山本均会長(岩手県浄法寺町元町長)から瀬戸内寂聴さん現代語訳源氏物語計20冊の寄贈
令和6年8月6日



本大学及び大学院は令和5年度
(公財)日本高等教育評価機構から
高い評価をいただきました。



本学短期大学部は令和5年度
(公財)日本高等教育評価機構から
高い評価をいただきました。



福島学院大学は持続可能な開発目標(SDGs)を
支援しています。



ホームページ



YouTube



Instagram



福島学院大学大学報 VOL. **36**

<https://www.fukushima-college.ac.jp>

発行 **福島学院大学** | 〒960-0181 福島県福島市宮代字乳児池1-1
編集 福島学院大学 入学広報課
発行日 令和7年5月31日
TEL 024-553-3221 FAX 024-553-3222